

弥勒佛の出世について

——特にその時節を中心に——

将来佛弥勒の浄土を説き、その信仰を鼓吹する大乘經典としていわゆる「弥勒六部經典」が存する。現に大正新脩大藏經第十四卷經集部一には次の順序で入藏されている。

觀弥勒菩薩上生兜率天經	劉宋沮渠京声訳
弥勒下生經	西晋 竺法護訳
弥勒下生成佛經	後秦鳩摩羅什訳
弥勒大成佛經	唐 義 淨訳
弥勒来时經	姚秦鳩摩羅什訳
	東晋 失 訳

この六部の經典は、一体何を基準として何時頃から選定されたのか不明の点が多く、又その經典相互の内容に

木村 宣彰

ついても必ずしも一貫性を有するとも認められず、なお検討すべき多くの課題を残している。殊に沮渠京声訳の『觀弥勒菩薩上生兜率天經』^①は、その経題から容易に類推できるように現在の弥勒菩薩の住処たる兜率天の莊嚴に対する觀法を説くものであり、内容的に他の五經が将来出現する弥勒佛の浄土の莊嚴を説く点でその所説の趣を異にしている。しかも漢訳では一經一訳であり、沮渠京声の訳出以外には別訳は存せず、当該課題とは別に研究を要するであろう。^②

当来に、われわれのこの世界に弥勒佛が出世し、衆生に説法教化を為す、いわゆる弥勒下生を説く『弥勒下生成佛經』等は、その主旨があくまでも「未來」の救済を目的とするものであるのに対して、現在、弥勒菩薩が住する兜率天の上妙の快樂を思惟し、そこへの往生を勧め

る上生信仰を説く『觀弥勒菩薩上生兜率天經』（『弥勒上生經』と略称する）は、正に「現在」の救済を願うものであり、兩者の所説は少しく相違する。従つて『弥勒下生成佛經』等にとつて、弥勒佛の出世の時節は極めて重大な関心事であろう。しかし、いま兜率天への上生を説く

『弥勒上生經』でもやがて弥勒菩薩が閻浮提に下生し成佛するとき、弥勒とともに下生し龍華三會に值遇することを説くのであるから、閻浮提における弥勒佛出世の時節について全く無関心というわけにはいかない。そこで先ず『弥勒上生經』に弥勒佛の出世について如何に説いているかを検討する。沮渠京声訳『弥勒上生經』は、その最初に「爾時、優婆離亦從座起、頭面作禮而白佛言。世尊、世尊往昔於毘尼中及諸經藏、說阿逸多次當作佛」と説いている。ここでは阿逸多と弥勒とは同一人であり、その阿逸多が当來に出現し成佛する將來佛であることは、既に毘尼藏や諸經典中に説かれる周知の事実であると為している。だが阿逸多の成佛の時節については何ら具体的に述べてはいない。しかし經の後半に至り、

如是処兜率陀天、晝夜恒說此經、度諸天子、閻浮提歲數五十六億萬歲、爾乃下生於閻浮提、如弥勒

下生經說。

と説いている。これによれば『弥勒上生經』は、明らかに『弥勒下生經』の後に成立したものであり、その『弥勒下生經』の經説を繼承して弥勒佛の出世を閻浮提の歲數で五十六億萬歳の後と説いているのである。

果して『弥勒下生經』にはかゝる説が存するのであるうか。先に挙げた竺法護訳は、もともと阿含部の經典の一部分を抄出し、それを『弥勒下生經』と称し、大乘の弥勒經典の一として六部經典に編入したものであるから一先ず置くとして、外の四經の鳩摩羅什訳『下生經』、義淨訳『下生經』、鳩摩羅什訳『成佛經』及び失訳の『來時經』について考察する。

(一) 鳩摩羅什訳『弥勒下生成佛經』は、その説処や會座の同聞衆などいわゆる通序の六成就の部分を含く欠き、突如として大智舍利佛の世尊に対する説法懇請から始まっている。即ち、舍利佛が「世尊、如前後經中説、弥勒当_二下作佛_一」と述べ、弥勒の下生作佛は既に世尊が前後の經中に説き賜うところと認めた上で「願欲_二広聞_一弥勒功德神力因莊嚴之事」と、世尊に當來の弥勒佛の国土の莊嚴等に関する説法を懇請する。世尊は舍利佛の請を受け、弥勒佛の出世及びその国土について詳説される。

舍利佛。四大海水以漸減少三千由旬。是時閻浮提

地、長十千由旬、廣八千由旬。平坦如鏡、名華軟草、遍覆其地。種種樹木華果茂盛、其樹悉皆高三十里。城邑次比鷄飛相及。人壽八万四千歲。智慧威德色力具足、安隱快樂、唯有三病、一者便利、二者飲食、三者衰老。女人年五百歲、爾乃行嫁。

彌勒佛の出世のときは、閻浮提における人壽が八万四千歳にも及び、病氣はただ便利・飲食・衰老の三病のみの甚だ好世となったときである。更に「時に世安樂にして怨賊劫竊の患あることなく、城邑・聚落の門を閉ずる者なく、亦哀惱水火刀兵及び諸の饑饉・毒害の難なし。人つねに慈心ありて恭敬和順し、諸根を調伏して語言謙遜なり」と為し、彌勒佛の出世は、この世が遠い未來に於いて甚だ理想の世界として達成されたときであるという。即ち、『彌勒下生經』では久遠の未來に人間の壽量が八万四千歳にも及ぶとき、彌勒が出世し龍華菩提樹の下で阿耨多羅三藐三菩提を得て三会の説法を為すと説いているのである。しかし、先に『彌勒上生經』に云うような五十六億万歳云々というような語は全く見られないのである。

(二) この『彌勒下生經』よりもその説相がより詳しい『彌勒大成佛經』では如何であろうか。同じく羅什の訳

出になる『成佛經』は、摩伽陀国波沙山の過去諸佛常降魔処における夏安居中の説法であるが、ここでも舍利佛が發問し「欲聞如来説未來佛開甘露道、彌勒名字功德神力国土莊嚴」と、世尊に説法を請う点は『彌勒下生經』と同じである。この『彌勒大成佛經』もまた未來佛彌勒の出世の歳数については具体的には何も示していないが、その世が好世であり、その国土の莊嚴を説くことはより優美である。そこで閻浮提の人民が「壽命具足八万四千歳、無有中夭、人身悉長一十六丈」となるとき、「爾時」に彌勒は「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂」の過去佛の甘露無常偈を説き、金剛莊嚴道場の龍華菩提樹下に坐し四魔を降すという。彌勒佛の出世については、『彌勒大成佛經』も『彌勒下生經』も共に人壽が八万四千歳に達するときに為している。ただ『下生經』ではその時の人民は甚だ長壽で病氣も少ない好世であることを説くのみであるのに対して『成佛經』では、彌勒佛出世の閻浮提が好世であることを、常に釈迦佛の出世が五濁惡世であったこととの対比の中で説いている。經によれば、釈迦牟尼佛出世のときの人民は「父母・沙門・婆羅門を識らず、道法を知らず、互に相悩害して刀兵劫に近づき、深く五欲に著し嫉妬諂佞し、曲濁

邪偽にして憐愍の心なく、「師長を敬わず、善友を識らず、報恩を知らず、五濁の世に生まれて慚愧を知らず、昼夜六時に相続して悪を作し、厭足を識らず、純ら不善を造つて五逆の悪を聚め、魚鱗のごとく相次いで求め厭くことを知らぬ」ものであったが、当来に弥勒が開導安慰し、歓喜を得せしめる衆生は「身は純らはれ法なり。心は純らはれ法なり。口は常に法を説き、福德智慧の人」であると説いている。

この『弥勒大成佛経』では弥勒佛の出世を釈迦佛との対比によって示しているばかりでなく、釈迦佛と弥勒佛との関係についても説いている。弥勒は、「貪欲・瞋恚・愚痴に迷惑する短命人」の充滿する「苦惡の世」に出世する釈迦牟尼佛に対して「忍辱勇猛の大導師は、能く五濁不善の世に於いて悪衆生を教化し、成熟し、彼をして修業し佛を見るを得せしむ」と三度に互り称讚しているのである。未來好世の弥勒佛が現在惡世の釈迦佛を數ずるのは、次の理由によるものであろう。

釈迦牟尼佛出五濁世、種種呵責為汝説法。無汝奈何、教殖来縁、今得見我、我今撰受是人等。

釈迦牟尼佛は五濁の世に出現したので種々に呵責し説法もしたが、汝をいかんとも為すことができなかつた。

ところが釈迦牟尼佛の教えによって殖えられた縁によって今わが弥勒佛に見えることが出来るのである。換言すれば、当来に弥勒佛が撰受する衆生とは、釈迦佛の教化を受けたが、釈迦佛の下では未だ機が熟さず、ようやく未來において機の熟する衆生であるという。

このように『弥勒大成佛経』では、弥勒の出世について『弥勒下生成佛経』と同じく將來、人壽が八万四千歳を具足するときであり、それは同時に五濁惡世で釈迦佛の下では未だ機の熟すことのなかつた悪衆生の機の熟するときでもある。この点については『下生経』では何ら触れていない。いずれにせよ羅什訳の『下生経』や『成佛経』を検討する限り、先に『弥勒上生経』に明している五十六億万歳の説はついに見い出すことは出来ないのである。

(三) しかば唐の義浄訳の『弥勒下生成佛経』や東晋の失訳の『弥勒来时経』ではいかがであろうか。義浄訳の『弥勒下生経』は先の羅什訳のそれと同本異訳とみられるのでその説相はほとんど変わらない。ここでも「慈氏下生」を「当来之世」となし、その具体的な歳数を示すことはなく、ただ弥勒出世の時を「時彼国中人、皆寿八万歳云々」と為しているのみである。その時の国土の

様子は羅什訳のそれと相違するところはない。ただ人民の寿命について「八万歳」と「八万四千歳」とが相違する。

(四) それでは「弥勒六部経」の一である『弥勒来时経』ではどのように説かれているのであろうか。この経もいわゆる通序の六成就の部分で、直ちに舍利佛が「佛常言、佛去後当有弥勒来、願欲從聞之」と述べるところから始まり、弥勒出世の時の国土の様子や人民の寿命について説き、「人民皆寿八万四千歳」と明かしている。ここでは『弥勒大成佛経』のように釈迦佛の世が「五濁の悪世」であることを殊更には説いていないが、弥勒佛の下で出家する比丘・比丘尼は、いずれも皆、釈迦佛の下での誦経者・慈心者・布施者・不瞋恚者・作佛図寺者・持佛骨著塔中者・焼香者・然灯者・懸僧者・散花者・読経者であるという。義浄訳『弥勒下生成佛経』等も釈迦佛の下での結縁を説いているが、本経はより具体的に詳しい。特にこの経で注目すべき点は、経の最末尾に次の様に説いていることである。

佛説経已、諸比丘及王百官、皆当奉行、佛経戒皆得度世、佛説如是。弥勒佛却後六十億残六十万歳当来下。

この経は右の経文で終わっている。即ち、最後に弥勒の当来下生のときを、佛滅後「六十億残六十万歳」の五十九億余万歳のときと為している。この経は「舍利佛者、是佛第一弟子」という異例の経文ではじまり、右の文で終わっている点から考え、或はこの経は前後の経文を欠くのか、或は他の経典からの抄出か、更に文献学的な検討を必要とするが、弥勒の出世については「人寿八万四千歳」となしつつ同時にそれは「却後六十億残六十万歳」のときであると説いているのである。しかし、かゝる所説は、先の『弥勒上生経』にいう「閻浮提数五十六億万歳、爾乃下生於閻浮提」の説とも一致しない。また、弥勒経典以外のおの他の大乘諸経典を検索してもかかる所説を見出すことはできない。いかなる根拠を有するものか不明である。

二

藏経中で主に弥勒佛の出世を説き、その浄土を明かす弥勒経典を中心として考察してきたが、それら以外にも弥勒佛について説く経典は決して少なくはない。既に阿含部の中でも弥勒が当来に出世することを説いている。長阿含第六『転輪聖王修行経』、中阿含第十三『説本経』

などにも説かれているところである。就中、長阿含の

やく慈心を懐き、修業によって十歳、二十歳、四十歳、

『転輪聖王修行経』は、当来佛としての弥勒を明かす経典としてはもっとも古層に属するものである。その『転

八十歳乃至四万歳と寿命を増し、人壽が四万歳に至ったとき、更に父母を孝養し、師長を敬事することによって

輪聖王修行経』では弥勒仏の出世に関して如何に説いているかを考察する。この経はその経題からも知られるように主として過去世の堅固念と名づく転輪聖王に関する

四万歳の寿命を八万歳に延長することになったという。かくして人壽が八万歳となったとき、爾の時に弥勒如来

所説が中心で弥勒佛については簡略に説かれている。ここでは寿命が延長し八万歳に至ったとき、大地は平整となり、溝坑丘墟棘などなく、又蚊蛇虻など毒虫のいない

行経』は弥勒の出世を人壽八万歳の時と断じ、その人壽の由来を詳述している点は特に注目に価する。

世界であり、病氣も寒・熱・飢・渴・大小便・欲・饕餮・老の九病のみで好ましい世界の出現したとき、「当於爾有佛出世、名為弥勒如来至真等正覚十号具足」と説いている。この経説で殊に重要なことは、人壽八万歳の

中阿含の『説本経』もまた弥勒の出世を「未来久遠」の「人民壽八万歳」となしている。先の『転輪聖王修行経』も『説本経』、『古来世時経』もともに人壽八万歳説を為すが、前者はその由来を詳述しているのに対して、

の由来について詳述していることである。過去世の堅固念転輪聖王は、その位を太子に譲るに当り、正行を為すべしと諭すが、太子は王の言葉に背き正行を行なわなかったため人民は苦厄に陥り、やがて人壽は四万歳より転減し一萬歳となり、更に千歳にまで減じたが、なお三悪業を為し、更に五百、三百乃至一萬歳と減じたが悪業を止めずついに人壽は十歳にまでなった。人壽十歳のとき女子は生後五ヶ月で行嫁す。その時に至り衆生をまよう

後者では八万歳が既定周知の事実として、単に未来久遠のことと説明しているのみである。又、そのとき閻浮提が好世であることは両経ともに認めるところであるが、特に『転輪聖王修行経』では病氣について寒・熱など九病を明かしているが、『説本経』は七病となし、後の大乘の弥勒經典でいう三病により近づいている。従って人壽八万歳の由来を説明し、七病より九病を説く方がより古く、弥勒出世の説としては原型を示すものであろう。恐らく長阿含の『転輪聖王修行経』が弥勒佛出世に関し

て人寿八万歳説を最初に打ち出した經典であろう。阿含の諸經は概ね右の説に従っているのである。

ところがここに一つ特異な經説が認められる。西晋白法祖訳の『佛般泥洹經』である。その巻下に「却後十五億七千六十万歳、乃復有佛耳」と説き、釈迦佛の滅後、十五億七千六十万歳にしてようやく佛が出現するのであり、佛世に値い、經法を聞き、衆僧に值うことがいかに困難であるかを強調している。この『佛般泥洹經』では十五億七千六十万歳後に出世する当來の佛の存在を説くが、その當來佛が弥勒であるとは明かしていない。しかし東晋失訳の『般泥洹經』巻下には次の様に説いている。

汝諸比丘、觀佛儀容、難復得觀、却後一億四千余歳、乃當復有弥勒佛耳。難常遇也。

この經文も佛に値遇することの困難なことを説くのが主旨であるが、ここでは明らかに當來の佛として弥勒の名を出している。先の『佛般泥洹經』とその歳数は相違するが、却後一億四千余歳に佛が出世し、それが弥勒佛であると説いている。この一億四千余歳説は他にはその例がなく、經自身もその説の根拠を示してはいない。先の人寿八万歳説は、弥勒の出世が現実の惡世とは違い未來久遠に達成される好世に於いてであることを示すもので

あるが、今の一億四千余歳説は實際に佛滅の時点からの歳数を計るものであり、先の説とはまったく別の系統に属するものである。

以上の考察から當來佛弥勒を説く阿含經典では、その出世を「人寿八万歳」のときと為し、大乘の弥勒經典では概ね「人寿八万四千歳」と為している。これは大乘經典に於いて法門や煩惱の多数なることを八万四千の大多数でもって表現するのが常であるが、今の場合も亦、阿含の八万歳を繼承しながら未來久遠であることを八万四千の大多数でもって表わしているのである。しかしその一方で『般泥洹經』など具体的に佛滅度からの歳数を問題にするものも存した。

三

後世、弥勒佛の出世は佛滅後五十六億七千万年のこととして伝承されている。また『弥勒上生經』でも「五十六億余歳」と為しているが、前來の考察ではかゝる説は未だ全く認められなかった。いわゆる「弥勒六部經」を検討しても五十六億七千万歳の經文は認められず、ただ人寿八万四千歳とのみ説いている。そこで次に弥勒經典以外の大乗經典について考察することにした。

竺法護訳の『賢劫経』巻七の「千佛興立品」に賢劫に出現する千佛を記している。その賢劫千佛の第五佛である慈氏如来について、

所生土地、城名_二妙意、王者所処。其佛威光照四十里。梵志種、父名_二梵手、母字_二梵経、子曰_二徳力、待者曰_二海氏、智慧上首弟子号_二慧光、神足曰_二堅精進^①と説き、その慈氏如来の出世の時の人寿を「八万四千歳」と為している。また、種々の因縁譬喩を集めた『賢愚経』巻十二の「波婆離品」には次の様に説いている。

我復次説_二当来之世、此閻浮提、土地方平、平坦広博、無_レ有_二山川、地生_二濡草、猶如_二天衣。爾時人民寿八万四千歳。(中略)彼時当_二有_二婆羅門家生_二一男児、字曰_二弥勒^②。

この説は前来の阿舎の教説を継承していること明らかである。この外、『雜譬喩経』、『出曜経』、『大集経』などにも同様な説を展開している。

しからば、具体的に弥勒佛出世の時節を明示する經典は存しないのであろうか。実は、先述の『弥勒上生経』の様に「五十六億万歳」と説く經典としては秦代の失訳經典で『一切智光明仙人慈心因縁不食肉経』と称する經典が存する。この経には迦波利婆羅門の子である弥勒の

本生を明すものであるが、その中で釈迦の予言として、

我涅槃後五十六億万歳、当_二於_二穰佉輪聖王国土華林園中金剛座処、龍華菩提樹下_二得_レ成_二佛道^③。

と説かれている。この『一切智光明仙人慈心因縁不食肉経』では人寿八万四千歳については全く言及していないが、佛滅度を起点として当来佛出世までの歳数を五十六億万歳として示している。これと同じ立場にあるのが『賢愚経』巻四「摩訶斯那優婆夷品」の所説である。即ち、

雖_レ於_二此末法之中、不_レ能_レ能度、縁_二此功德、当_二於_二人天_二受_二無窮福。弥勒世尊、不_レ久_二五十六億十千万歳、来_レ此成佛。当_二為_二汝等_二広説_二妙法^④。

ここでは弥勒が閻浮提に來つて成佛するのは五十六億十千万歳であるというが、この「五十六億十千万歳」は高麗版に従うものであり、宋元明の三本では「五十六億七千万歳」である。三本を是とすべきである。しかし、この歳数が何に根拠するかについては何ら明らかにしていない。又、人寿については何ら関説していないところを見ると、先の『転輪聖王修行経』などと系統を異にするものであろう。この経説は「五十六億七千万歳」と説く点で重要である。

また、姚秦竺佛念訳の『菩薩從兜術天降神母胎説広普經』(『菩薩処胎經』)には、釈迦と弥勒とを対比して次のように説いている。

弥勒当知。汝復受記五十六億七千万歳、於此樹王下一成無上等正覚。我以右脇生、汝弥勒從頂八生。我寿百歳、弥勒寿八万四千歳。我国土、汝国土金。我国土苦、汝国土楽。

釈迦は右脇より、弥勒は頂より生まれるとは釈迦が刹帝利種、弥勒が婆羅門種であることを示すものであり、その他、両者の寿量、国土を対比している。ここでも明確に「五十六億七千万歳」の歳数を示して弥勒の成正覚の受記を為している。更に経は、弥勒佛の龍華三会の説法の所化はいずれも釈迦佛の下で三帰・五戒を受持し、南無佛と一称した衆生であることを説いているが、その衆生の結縁・根熟と五十六億七千万年との関係などについては言及していない。かゝる観点に立つとき、後漢の安世高の訳出として伝わる『佛説処胎經』は特に注目すべきである。諸阿羅漢が阿難に対して、佛在世に世尊に水を与えなかったこと、佛の般涅槃に際し住世を請わなかったことを難じたのに応えて、佛に自在力があること、次に弥勒が来下作佛することを述べる。そこで弥勒の来

下について次のように説いている。

佛言。弥勒不來下有四因縁。一者有時福応彼問、二者是間人無能受経者、三者功德未滿、四者世間有能説経者、故弥勒不下。当來下余有五億七千六十万歳。

未だ弥勒がこの閻浮提に下生作佛しない理由として四因縁を挙げている。その第一は弥勒の住する彼の兜率天の天寿を尽さざる間は下生することはないという意味であり、第二第三は此の閻浮提の衆生に関するもので、衆生の機が熟さず、経を受ける能力が無い場合、未だ功德を成就せざる場合には弥勒は下生しない。また第四には、この世に能説経者たる佛が存するときは下生作佛することはない。従って右の条件を満し、兜率天の寿量を尽すとき、即ち五億七千六十万歳にして弥勒が出世するといふ。

従来、弥勒佛を問題にするとき、この『処胎經』に言及することはなかったが、弥勒下生の条件を示し、釈迦文佛の般涅槃後の五億七千六十万歳にして来下作佛することを明言している点で重要である。

この五億七千六十万歳説は、先の『一切智光明仙人慈心因縁不食肉經』の五十六億万歳説や『菩薩処胎經』の

五十六億七千万歳説とも相違する。しかも単位や位どりが異なる許でなく数字の配列それ自体も異なっているのである。この五億七千六十万歳は、弥勒が兜率天に上生し、そこでの寿命を尽して下生するまでの兜率天の寿命を示したものである。兜率天の寿命については種々の経論に説かれているが、『賢愚経』には次のように説いている。主の佛告阿難。当生第四兜率天上、此閻浮提四百歳、無量為彼天上二日一夜、亦三十日為一月、十二月為一歲、彼兜率天寿四千歳。

この世の四百年が兜率天の一日一夜に相当し、彼の天の寿命は四千歳である。右の经文に従って計るとき、兜率天の寿命は閻浮提の歳数で五億七千六百万歳となる。『処処経』の「五億七千六十万歳」は「五億七千六百万歳」の写誤であろう。更にこの五億七千六百万歳説は、有部の『大毘婆沙論』中の学説にも一致する。同書卷一七八に「有説」として次のように説いている。

唯觀史多天寿量、与菩薩成佛及瞻部州人見佛業熟時分相称。謂人間經五十七俱胝六十千歳、能化所化善根成熟彼即是觀史多天寿量。

ここで云う「五十七俱胝六十千歳」は、同書卷一三五に「五十七俱胝六十百千歳」と記している点より推して

「百」一字を脱するものである。又、俱胝とは『本行集経』等によれば一千万に相当する。従って『大毘婆沙論』に云う兜率天の寿命とは五億七千六百万歳ということになる。玄奘訳の『本事経』に「觀史多天寿量四千、当於人間五億七千六百万歳」と記されている通りである。だが、この億の算位のとり方によって五十七億と表記される。例えば僧伽跋摩等訳の『雜阿毘曇心論』第二などに「兜率陀天寿四千歳、人間五十七億六百万歳」と兜率での天寿を記している通りである。

四

当来佛弥勒の出世の時節について阿含の諸経では、人寿が八万歳に到るときであると説いているが、これは未来久遠のことであり、現在の濁悪世とは比較にはならないような理想の好世である。且、そのときには所化の衆生のいわゆる機根が熟し、能化の仏の教説を受けることが可能となる時期でもあるという。大乘の弥勒經典も亦これを継承しつつ、その人寿を更に八万四千歳に延長して説いている。

その一方で実際に弥勒が将来出世するまでの歳教を求め運きもあつた。一億四千歳や十五億余歳と為す『般

泥洹經』等がその流れの中にあるが、ただ単に一億余歳などと説くのであれば、それは人寿八万歳と同じく現在からみて悠久の将来のことであることを示すのみで何らの根拠もなく、未来久遠と説くのと変わらない。そこで一生補処の思想を導入することにより、その一生を兜率天に於ける一生であると考え、弥勒佛出世までの歳数とは、兜率天の寿命に一致すると考えるに到った。かくして算出されたのが『佛説処処經』等の五億七千六百万歳である。だが、翻訳に際してはインドと中国との間で億の算値の位取りに相違があり、一桁上に表記されるのが通例である。しかし実際に広く伝わる通説は周知の如く五十六億七千万歳で、右の説とは相違する。弥勒六部經典にはこの歳数は認められない。前述の如く、この歳数を説くのは竺佛念訳の『菩薩処胎經』や慧覺等訳の『賢愚經』など数種の經典である。五十七億六千万歳を五十六億七千万歳と為したのは竺佛念ら訳者の参差の過と断じてよいか否か問題は残るが、中国をはじめ漢訳佛敎圈に於いて五十六億七千万歳説が流布したのは、偏えにその数字の語調がととのつていたことと、『菩薩処胎經』等の流行とに根拠すると考えられる。

註記

- ① 『弥勒六部經』の中、竺法護訳『弥勒下生經』一卷は「丹藏」の中には入藏されていなかったが、「宋藏」においてはじめて編入された。しかし『出三藏記集』『開元釈教錄』などの經錄を検討するとき、竺法護に『弥勒下生經』と称する經典の訳出はなかった。ただ『開元錄』等に竺法護訳として『弥勒成佛經』（一名『弥勒当来下生經』）を記載しているが、既に唐代には散佚していたと言う。一方、増一阿含卷四の第三經が『弥勒下生經』の名で別行していた。そこで「宋藏」に於いて、それを竺法護訳として編入したものである。今日までそれを継承している。現在の『弥勒下生經』は増一阿含の抄經であり、訳者も竺法護ではない。
- ② 『弥勒上生經』が『觀無量壽經』などの觀法を説く經典と密接な関りを有して成立したものであることは、その經名からも類推できる（拙稿「弥勒信仰について―觀弥勒菩薩上生兜率天經の考察―」（要旨）『大谷学報』六二―四）又、『禪秘要法經』、『首楞嚴三昧經』など禪觀を説く經典にしばしば兜率往生が説かれており、それら三昧經典との関連も重要な課題として残る。
- ③ 『弥勒上生經』（大正14・四一八c）
- ④ 『弥勒上生經』（大正14・四二二c）
- ⑤ 『弥勒下生成佛經』（大正14・四三二c）四三二a）。また同經には「能於五濁惡世、教化如是等百万億諸惡衆生、令修善本、求生我所」（大正14・四三二a）とも説かれてゐる。
- ⑥ 『弥勒来时經』（大正14・四三五a）

⑦ 『長阿含經』(大正1・四一c~四二c)

⑧ 『中阿含經』(大正1・五〇九c)なお、『說本經』では当時の病気を七病となしているが、同經の異訳『古來世時經』では後の大乘經典と同じく三病となしている。

⑨ 『佛般泥洹經』(大正1・一七二c)

⑩ 『般泥洹經』卷下(大正1・一八八b)

⑪ 『賢劫經』卷七(大正14・五〇c)

⑫ 『賢愚經』卷十二(大正4・四三五c)

⑬ 『雜譬喻經』(大正4・四九九b)

⑭ 『出曜經』卷第一無常品(大正4・六〇九c)。經に「當來之世衆生之類、壽八万四千歲。……有如來出世。名曰弥勒至真等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師号佛世尊」と説き、更に「広説如弥勒下生」と述べている。

⑮ 『大方等大集經』賢護分(大正13・八九五a)

⑯ 『一切智光明仙人慈心因縁不食肉經』(大正3・四五八

c)

⑰ 『賢愚經』卷四(大正4・三七六a)

⑱ 『菩薩処胎經』(大正12・一〇二五c)

⑲ 『佛説処処經』(大正17・五二四c)

⑳ 『賢愚經』(大正4・四三七a)

㉑ 『大毘婆沙論』卷一七八(大正27・八九二c)

㉒ 『大毘婆沙論』卷一三五(大正27・六九八b)

㉓ 隋の闍那崛多訳『佛本行集經』卷十二に「一百百千、是名拘致。千萬」(大正3・七〇九c)と記している。又、

慧琳『一切経音義』一(大正54・三一四b)など参照。

㉔ 『本事經』(大正17・六九八c)

㉕ 新羅の憬興は『三弥勒経疏』に「西方億有二種。一十方為億、二百万為億」(大正38・三一六a)と説いている。

又、窮基も西方の億に三種あるという。

㉖ 『雜阿毘曇心論』(大正28・八八七c)